

---

## 原著論文

---

# 新聞社の調査報道制作過程におけるデスクの役割に関する研究：「北海道警裏金問題」報道を事例に

Study of the Desk Editor's Role in the Production of Investigative Reporting: Case study of a Newspaper's Investigation into Secret Funding to the Hokkaido Prefectural Police

キーワード：

調査報道, ニュース制作過程, 編集者, デスク, 自律性

keyword：

investigative reporting, news production process, editor, desk, autonomy

立教大学大学院経営学研究科 辻 和 洋

Graduate School of Business Administration, Rikkyo University Kazuhiro TSUJI

立教大学 中 原 淳

Rikkyo University Jun NAKAHARA

---

### 要 約

本研究は、調査報道の困難さを乗り越え、推進していくための新聞社のデスクの役割について、ニュース制作過程を通じて検証する。その分析対象には、調査報道の決定的な事例として2004年度に新聞協会賞を受賞した北海道新聞社「北海道警裏金問題」報道を取り上げた。調査報道は一般的な報道に比べて記事化の不確実性が高く、リスクもコストも高いと言われる報道形態である。その中で調査報道の成立には、デスクが重要な役割を果たすとの指摘がある。しかし、ニュース制作過程研究において、調査報道におけるデスクの役割はほとんど実証的に明らかにされていない。そのため、デスクによる記者や上司らへの働きかけなどについて、本事例を担当したデスクと記者に半構造化インタビューを行った。

---

原稿受付：2020年12月17日

掲載決定：2021年5月10日

調査の結果、デスクは調査報道のニュース制作過程において、取材のビジョンと目標を熟考し、明確化した上で取材班を結成するといった取材に向けての戦略を入念に立てていた。記者らに対しては取材活動の自律性を確保したり、鼓舞したりする取材に対する支援行動が見られた。また上司らに対しては社内で議論の場を積極的に設け、説明責任を果たしていた。これらの行動は先行研究において描かれていない行動であり、調査報道においてニュース制作を推進していく上で重要なデスクの役割である可能性が示唆された。

## Abstract

This study examines the role of newspaper desks in overcoming the difficulties of investigative reporting through the news production process. The subject of the analysis is the reporting by the Hokkaido Shimibun (newspaper) on secret funding to the Hokkaido Prefectural Police. The paper received the Japan Newspaper Publishers and Editors Association Prize in 2004 for its reporting. We focus on a desk editor's behavior in the news production process. Investigative reporting is characterized by high uncertainty, high costs and extensive time spent researching and reporting, compared to general coverage. Although some researchers and journalists point out that desk editor behavior is important in the investigative reporting process, preceding studies have only partially identified desk editor behavior. Therefore, this study focuses on desk editor behaviors such as approaching reporters, superiors, and other desk editors, based on interviews with reporters and the desk editor.

The findings are that the desk editor sets coverage vision and goals before the start of coverage. After that, the desk editor built a reporting team. During the reporting, the desk editor urged members to pursue investigative reporting and encouraged them to act autonomously. In addition, the desk editor was accountable to their superiors and other desk editors to discuss and encourage the reporting. Preceding studies do not indicate these behaviors, but it is implied that these behaviors are important for the reporters as they pursue the story.

## 1 はじめに

ジャーナリズムの存立根拠として「公権力の監視」「国家の監視」が挙げられる。ジャーナリズムにこうした権力監視の役割を求められるのも、権力は監視なくして腐敗を免れないという歴史的に形成されてきた根拠に基づくからである(根津, 2019)。それが民主的社会の維持にとって必要不可欠な機能であり、特に権力監視機能を果たす上で、最も有力なのが調査報道である(谷口, 2015)。

調査報道とは、「当局者による発表に依拠することなく、独自の問題意識をもって、隠れている・隠されている事象を掘り起こし、報道すること」(現代ジャーナリズム事典, 2014)である。調査報道は、情報提供や一般的な取材から記者の問題意識によって新たな事実を発掘することなどがきっかけになり、日常の取材活動の延長で行われることが多い。調査報道の歴史は古く、起源はアメリカの植民地時代に遡るとされる。また1902～1912年は、政治や企業などの腐敗を暴く「マックレイカー」と呼ばれるジャーナリストたちが盛んに活動した黄金期とされる(Klein, 2010)。世界的に最も有名な調査報道として、1974年にアメリカのワシントンポスト紙が報じた「ウォーターゲート事件」報道があるようにマスメディアが調査報道の一翼を担ってきた歴史がある。

しかし近年、調査報道が下火であるという指摘がある。富樫ら(2008:14)がNHKの記者らに実施した調査では、調査報道を「やっている」と答えた記者は7%、「ある程度やっている」は27%にとどまり、その一方で「やりたいがやっていない」は55%と半数以上に上った。その理由として「身近に調査報道をしている先輩の姿を見ることがない」、「自分自身の能力の問題」などといった記者自身の技能の欠如が挙げられている。さらに、「どのような調査報道をやるか、取材グループ内部でのコンセンサスが得られなかった」、「費用、時間がかかるなどの理由で上司の理解が得ら

れない」など、上司、マネジメントに関する回答も少なくなかった。調査報道を阻む壁として、記者自身の技能、報道機関の経営難や記者クラブ中心の報道体制、取材現場のゆとりのなさなど多様な点が挙げられているが(小俣, 2009)、上司やマネジメントに関する組織的要因も無視はできない。したがって、編集に携わる直接的な上司であるデスクの役割が調査報道の成立に影響を与える可能性がある。

それはマスメディアには特徴的な組織形態があるからである。マスメディアは、ライン中心の単線型支配による管理体制が敷かれており(山下, 1996)、ニュース制作は主に記者が取材を行い、デスクが上司として編集を担う。根津(2019:236)は編集現場の上司論という観点から歴史的に検証し、「個々の記者が力を発揮するためには、かれらの問題意識を理解し、記者一人一人の創意工夫を尊重・支援する編集幹部や上司の存在が重要な鍵になる」としており、デスクの役割の重要性を述べている。

調査報道に関して言えば、小俣(2009:52)は「調査報道では、言うまでもなく、デスクの基礎的な取材指揮能力も重要になってくる」と指摘する。調査報道の特徴として、原(2008)は「記者発表を元にした記事と異なり、調査報道は、人手も時間もお金もかかる。それだけのコストをかけて成果が生まれるかどうか不明だ。さらに報道上の責任問題が起きれば、報道機関に対して責任が問われる。それだけのリスクをおかして調査報道してもシリアスな地味な問題は必ずしも部数増に結びつくわけではない」としている。調査報道は発表報道と比べて不確実性が高く、コストもリスクも高い点が特徴として挙げられる。

調査報道を実践する上でこのような障壁がある中で、小俣(2009)はデスクの積極果敢な精神、取材意欲が、現場の記者たちを鼓舞し、また、表現方法や事実関係の確認に細心の注意を払うといった行動が必要だという。

実際にデスクの行動が調査報道成立に大きな影響を与えた事例もある。例えば、1988年の朝日新聞による「リクルート事件」報道は、捜査当局が刑事事件化するのを断念した中、朝日新聞横浜支局のデスクの山本博氏が、取材班を作って陣頭指揮をとり、記者たちが独自の取材で企業と政治家らの癒着を暴いた（山本、1990）。また、2000年、毎日新聞社が東北旧石器文化研究所の副理事長が遺跡で石器を埋め、ねつ造していた事実を暴いた「旧石器ねつ造事件」報道でも、デスクが部長に取材続行を直談判したことで、取材班がねつ造の証拠写真と動画を押さえることに成功した（毎日新聞旧石器遺跡取材班、2001）。

このように記者たちと密接に関わり、時には社内内で交渉したりするデスクの行動が調査報道成立に影響を与えていることが考えられる。

そこで本研究では、北海道新聞社が2004年度新聞協会賞を受賞した「北海道警裏金問題」報道を事例に取り上げ、調査報道のニュース制作過程におけるデスクの役割を明らかにする。事例研究は、「どのように」「なぜ」という問いおよび探索的に「何が」を問う研究に適しているとされる（野村、2018）。また、Yin（2011）は事例の選定基準の一つに「決定的な事例」を挙げている。本事例は、2004年度に日本新聞協会賞を受賞した日本の代表的な調査報道の一つであり、権力監視機能を果たしている決定的な調査報道である。記者の手記、インタビュー記事などの記録も豊富にある。この事例を分析し、調査報道においてデスクがどのような役割を担っているのか、その行動を明らかにする。

## 2 デスクに関する先行研究

### 2.1 ニュース制作過程におけるデスクの行動

ニュース制作過程に関する研究は、マスコミュニケーション研究における分析単位として、「誰が（Who）」「何を（What）」「どのような経路で

（Channel）」「誰に（Whom）」「どのような効果（Effect）」という5つの分類があるが（Laswell, 1948）、そのうちの「誰が」にあたる送り手研究に分類される。マス・コミュニケーション研究において、メッセージもしくはコンテンツが所与のものとなる前の過程に注目することは相対的に少ない（Shoemaker & Reese, 1991）。

こうした中で近年では、福島第一原発事故における災害報道過程をエスノグラフィーによって調査した桶田（2015）や、フェイクニュースの検証記事の制作過程を聞き取り調査によって明らかにした藤代（2019）などがニュース制作過程研究として調査されている。しかし、こうした研究は、送り手の内実を明らかにした貴重な研究蓄積ではあるものの、制作過程において後述する重要な役割を担う可能性があるデスクに照射された研究ではない。

デスクとは、机（デスク）に陣取り、記者に取材を指示したり、記者の原稿をチェックしたりする人（現代ジャーナリズム事典、2014）を指す。また、その日の紙面の責任者として、編集会議などで出稿内容の説明や、紙面制作側との連絡調整、売り込みなども行う（田中、2019）。

藤森（2013：369）はデスクの具体的な業務について「自らが所属する部が担当するページにどのような記事を盛るかを考え、原稿の発注やチェックをする。また定時に他部のデスクと集まり、新聞で最も目立つ一面トップにどのニュースを置くべきかなどを、編集局次長の司会で話し合う。つまり、担当面の企画、指揮、チェックとともに、その日の全ニュースの価値判断者の一人ともなる」と述べている。デスクは基本的に組織内にいながら、ニュースの企画、記者への原稿の依頼、原稿の編集、紙面化への社内交渉、紙面化した後の対応といったニュースの制作過程全般に携わっている。いい新聞になるか、駄目な紙面になるかは、取材・原稿づくりの第一線で日々指揮を執るデスクたちの力量次第であり、原稿をめぐつ

て記者とデスクが率直に議論を戦わせることは珍しいことではないという（藤森, 2013）。

Sigal (1973) は、アメリカのニューヨークタイムズとワシントンポストを事例に組織内におけるニュース制作者の行動について明らかにした。2社は締め切りまでに広範なニュースを完成させなければならないという制約があるため、組織は専門化、分業化されている。その中で、ニュース制作にあたっては、デスクが記者の日々の業務を指揮し、記者は継続的にデスクに相談しながら取材に取り組む。主に、取材のアサイン、情報の収集、原稿の編集というニュース制作の段階があり、それぞれの段階においてデスクと記者が綿密に連携している。取材のアサインの段階では、取材テーマはデスクと記者が協働で決めていた。情報の収集の段階においても、取材は記者が主導で進めていくが、デスクは担当記者に電話などで他の場所で得た手がかりとなる情報を伝えていた。また、デスクは締め切りの許される範囲で、記者が職場で原稿を書いているときは新たな視点や盛り込むべき情報などについても提案していた。原稿の編集の段階では、デスクは記者に対して内容について質問をし、他の記事と比較して価値の評価を行っていた。

デスクのニュース価値の評価に関しては、ゲートキーピング研究という研究群がある。ゲートキーピングとは、ある特定のニュースが「ゲート」を通過して、ニュースとして報じられるかどうかを決定する一連の工程のことである（McQuail, 2000）。「ゲート」には、ゲートキーパーと呼ばれる門番が存在し、ニュースの取捨選択の判断を行う。記者が書いた原稿の修正はデスクの専権であり、ニュースの価値判断者であるため（藤森, 2013）、ゲートキーパーはデスクを指すことが多い。

大石ら（2000）は、茨城新聞のニュース制作過程についてヒアリング調査によってゲートキーパー論の観点から検証した。職制上はニュース素材の取捨選択は権限の帰属が定められているが、

デスクや編集部員の間で自由に交わされる会話によってニュース価値は生成されているとしている。

このように、デスクは情報収集から執筆までのニュース制作過程で絶えず記者と連携して行動をしている。Ivask (2019) は、デスクによる記者へのフィードバックやコーチングの重要性を指摘する。エストニアの新聞社での参与観察などによって調査を実施し、そこでは、デスクは経験の少ない記者に仕事を指示する傾向がある一方で、経験豊富なジャーナリストに対しては建設的なフィードバックとコーチングが欠けていた。Ivask (2019) は、経験のあるなしに関わらず、建設的なフィードバックやコーチングを提供しないと、記者に悪影響を与える可能性があるとして指摘し、特に記者が「不確実性が高い」と感じる状況では、有益なコミュニケーションをとる必要があるとしている。

## 2.2 調査報道におけるデスクの行動

本節では調査報道に焦点を当てたニュース制作過程研究について述べる。

調査報道のニュース制作過程に関する研究としては、Protessら（1991）の研究がある。Protessら（1991）は、アメリカの報道機関の協力を得て詳細なインタビュー調査、参与観察を実施した。1981～1988年、政府が関わる詐欺や警察組織による暴行事件などを暴いた6つの調査報道の事例を取り上げ、その報道の共通したニュース制作過程を明らかにした。具体的には、調査に関心を持つ、概念化する、証拠を発展させる、記事化の準備をするという4つの段階があると述べている。しかし、記事化の準備をするという段階で、組織内においてデスクらが記事を洗練する手助けをするということのみが記述され、ニュース制作における組織内の行動が限定的にしか描かれていない。日々記者とコミュニケーションをとりながら陣頭指揮をし、ニュースの価値判断をしたり、編集会議に参加したりするデスクが、ニュース制作

過程の中で果たしている役割は少なくないと考えられる。ニュース制作全段階に関わるため、調査報道の取材方針を定め、そのビジョンをニュース制作ラインにいる記者、あるいは編集幹部や他のデスクに示していくことはデスクにしかできない役割である。こうした点も踏まえて調査報道の制作過程を見ていく必要があると言える。

小俣（2009）は、調査報道に取り組むか否かの判断は、デスクの負うところが大きく、デスクの基礎的な取材指揮能力が重要になると指摘している。また、調査報道の事例を検証し、「強いリーダーがいて初めて歴史に残る調査報道が成立している」（小俣、2009：52）と主張している。これらの指摘からもデスクが調査報道を推進するために指揮をとり、ニュース制作過程に一定の影響を与えていることが考えられる。

このようにデスクは記者らと連携しながら、ニュース制作過程の全般に携わる役割を担っている。調査報道においても取材指揮能力などが重要であるとの指摘があるものの、その内実は明らかになっていない。したがって、本研究では調査報道成立において重要な役割を果たし得るデスクの行動を明らかにするため、デスクに焦点を当て、ニュース制作過程を検証する。

### 3 研究方法

本事例は、後述するように、警察組織という強大な権力の不祥事を扱っており、権力監視機能を果たしている決定的な調査報道の事例である。また、2004年度に日本新聞協会賞を受賞した日本における代表的な調査報道の一つであり、報道内容を深く理解できるデスクの手記、インタビュー記事などの記録も豊富にある。こうした文献には権力監視の調査報道がデスクの視点から一定描かれており、深く調査する手がかりになることから、本事例が分析対象に最も合致するとして選定した。

調査に際し、この事例の取材に携わったデスク

の高田昌幸氏（以下、当時の呼称で高田デスクと表記する）のほか、記者2名を対象とし、メールにて調査協力の依頼を行った。2019年7月から2021年2月にかけて、計3名に対し、別々に半構造化インタビューを実施した。予め作成した質問項目とともにインタビューから語られる内容を柔軟に聞き取り、事前に想定し得ないデスクの行動も明らかにすることによって、本事例のニュース制作過程における重要な行動やコミュニケーションの可視化を図った。

インタビュー調査では、まず、研究倫理上の配慮として、インタビューに対し、文書および口頭にて研究の趣旨を説明し、学会誌等での発表を行う旨が記述された研究誓約書に承諾することの同意を文書で得た。その後、事前に作成したインタビューガイドを参照しながら適宜質問する形で、半構造化インタビューを行った。調査報道の一連のニュース制作過程におけるデスクの行動に関することについて尋ねた。インタビューは3名で、計4回行われた。回答時間は、1回あたり1時間～4時間半程度で計8時間11分だった。

また、この報道に関連する文献『追及・北海道警「裏金」疑惑』（北海道新聞取材班、2004）、『真実 新聞が警察に跪いた日』（高田、2014）、『警察幹部を逮捕せよ！ 泥沼の裏金作り』（大谷ら、2004）とインタビューデータの照合を行った。

インタビューで明らかになったニュース制作過程は、可能な限りProtesら（1991）が先行研究で示した4つの段階に当てはめて整理した。

## 4 事例の概要

### 4.1 北海道新聞社の概要

北海道新聞社は1942年に創刊した道内シェアトップのブロック紙である。本事例の報道当時、発行部数は、朝刊約122万8000部、夕刊約70万部で、編集局は編集局長以下、645名が所属していた（日本新聞年鑑、2003）。本事例の調査報道

は、政治や社会のニュースを担当する編集局報道本部の高田デスクが原稿を取りまとめ、A記者、B記者を含む警察・司法担当を中心とした取材班の記者約10人が取材を行った。

#### 4.2 本事例の経緯

2003年11月、テレビ朝日の報道番組「ザ・スクープスペシャル」で、北海道内の警察署が長期間、空の捜査費用請求や偽領収書作成をして裏金をプールしている問題が発覚した。地元紙である北海道新聞はその報道を受け、徹底した取材によって北海道警の裏金疑惑について独自に追及を開始した。捜査関係者の証言を集め、組織的な裏金づくりの実態を暴いていった。道警は捜査協力者の謝礼や捜査上での経費に充てる道費の「捜査用報償費」や国費の「捜査費」名目で、書類を偽造して架空請求し、警察署で裏金をプールしていた。裏帳簿の存在も明らかになった。

当初、道警は裏金の存在を否定していたが、長期間の綿密な取材のなかで、警察幹部が、転勤時の賤別代や飲食代など、総額7億1500万円もの不正支出があったことが発覚した。実名による元警察幹部の内部告発者も現れたこともあり、道警は最終的に2004年11月、組織的裏金作りの事実を認め、利子も含めた9億円超の資金の返還を行うことになった。処分者数は約3,000人に上った。

### 5 ニュース制作過程におけるデスクの行動

#### 5.1 調査に関心を持つ

高田デスクが、本事例の調査に関心を持ったきっかけはテレビ番組であった。2003年11月23日、高田デスクは新聞のテレビ欄を見ると、テレビ朝日が夕方の報道番組「ザ・スクープスペシャル」で、北海道警に関するニュースを報じることを知り、すぐに対応できるように北海道新聞社に行き、応接のテレビでその報道番組を見ていたという。そこには、道警旭川中央署の捜査用報償費

に関する内部資料が映っていた。そして、「捜査用報償費が裏金になっている疑いが濃厚」と報じられていた。

*開示請求やったらどうなるかなんてのは大体もろろんわかっていたので。でもテレビの画面に出てくるのは、いわゆる役所の黒塗りとは違う、要するに現物を手にして、現物をなんかこう、黒じゃなくてばかしてるような、文字を。(高田デスク)*

高田デスクは、内部資料に「黒塗り<sup>(1)</sup>」された部分が見当たらないことから、情報公開制度に基づく開示請求により入手した内部資料ではなく、内部告発者によって提供された資料だと判断した。そして、その日のうちに記者に取材に行かせ、同じ資料を入手することができたという。翌日までは関係者に取材して、テレビ朝日が報じた内容について事実確認もできていた。

*次の日には、ほとんど当たり終わって、書ける状態になっていたんじゃないのかな。でもまだ書きませんでしたね。テレビでやった次の日の朝刊に、当然朝日(新聞)が出たんですよ。で、僕はその次に書いたんです、確か。中2日遅れぐらいですね。でも、その間もずーっと考えてましたから。作戦を考えてました。(高田デスク)*

高田デスクの語りによると、テレビ朝日が報じたニュースを後追いつける記事以上に、その後、テレビ朝日ができなかったことをどうすればできるか、時間をかけて一人で考えていたという。具体的にはどうすれば道警が裏金を認めるか取材の組み立てを考えていたという。

*まあ警察組織なので、あつという間に口裏合わせと証拠握りつぶしで終わっちゃうだろうと。で、2つ3つ書けたところで、それぞれ「知りませ*

ん」っていうコメント出て。こういう取材っていうのは認めさせないと意味がないと思ったので、どうやったら相手（道警）が認めるかっていうことを考えてましたね。そのための取材の組み立てっていうのを考えてました。それを2日くらいかけてじーっと考えてましたね。（高田デスク）

## 5.2 概念化する

高田デスクは会社内の過去の資料や新聞記事が保管されている部屋に行ったり、近隣の図書館に行ったりして参考になりそうな資料を徹底的に調べ、この問題の本質を見極め、仮説を立てていたという。そして、取材の全体的な流れを考え、戦略を決めた。

どうやったらオール警察だと言えるかな、ってのを考えてましたね。だからこう見えたわけです、やり方が。1日札幌の図書館にこもって。実は、会社に現れなかったわけじゃなくて、会社の調査部にいて、過去記事の、データベースにもなっていない切り抜きをひっくりかえしたり、あとは図書館に行って調べ物をしたりとか。ずーっと考えて、戦略を作るみたいな。（高田デスク）

最初に全体像をバーンと書くと。最初に「全道警でやってる！」って書いて、あとは個別に書くと。もうそういう組み立てにしました。（高田デスク）

大事なのは、いきなり最初に上から書くことなんです。僕はこういう風に睨んでたんですね。当時。全体でやっていると。一部署のことが出てきたら、そこを抑えにかかるわけですよ。道警の内部は。例えばA署の裏金だったら、A署の経験者とか現職幹部とか抑えにかかるわけじゃないですか。「全部でやってるよ！」ってばーんと書いたら、どうするかっていうと、全部の部署に対して道警の中枢部から、「この問題こういう風に書かれてるけど」要するに全員が関わってるわけな

ので、「でも余計なこと言うなよ」みたいな指令が出る。絶対出る。そうすると、普段から道警本部とかに対して面白く思っていないやつっていっぱいいるので「なーんで俺たちそんなこと言われなきゃいけないんだ」みたいな、絶対組織に裂け目ができると思ってて。「その裂け目に手を突っ込むんだ、俺たち」みたいな。裂け目を作るために、あと口裏合わせをされないために、だから上から行く。（高田デスク）

高田デスクは、個別の警察署の事案を書くよりも組織ぐるみで行なっている事案であると書くという戦略を考えた。そうすれば、道警の中枢部から各警察署に指令が出て様々な反発が出るだろうという仮説を立て、そこから取材を始めること考えたという。さらに、この問題について道議会の開会を念頭に置きつつ、どのように進めていくべきかスケジュールの見通しも立てたという。

これが始まったのが11月じゃないですか。11月から始めて、もう12月議会は間に合わないから、3月の道の定例議会で一番大きな騒ぎになるようにする。そこで大体決まるから。最終的には6月議会くらいで認めればいいな、みたいな。（高田デスク）

このように高田デスクは取材方針を2日かけて考え、今後の具体的なビジョンと目標を設定したという。そして、11月25日に北海道新聞報道本部の警察、司法担当の記者ら約10人を会社を集めて初めて会議を開いた。会議では、「道警の捜査用報償費問題について」とタイトルのついたA4サイズの紙を一枚配付した。紙には、「旭川中央署など既出のもの以外に、他の署・部局でも同様の疑惑があることを明らかにする。つまり『ヨコ』に広げる」、「報償費を裏金にする『手口』を明らかにする。官僚文化はどこも同じなので、手口は『伝統』と『パターン』があるはず」、「全国で同種の問題が多発していることを示す」、「情報



開示請求を使って道警の報償費の全体像（予算規模、各部局への配分、その推移等）を明らかにする」、「しばらくは朝刊で連続的に出稿することをめざす。連続出稿によって『本気』であることを示す」と箇条書きで記し、明確な取材目標を伝えた。しかし、中には否定的な意見を持つ記者もいたという。

（反対意見で）一番多かったのは「事件事故のネタ取れなくなったらどうするんですか？」。あともう一つはあれですよ、「それで会社から何か言われたらどうするんですか？」とか。「会社からって、俺以外で誰が文句言うの？俺が担当デスクなんだけど。まあ他の人は色々言うかも知れないけど、もし言われたら、『デスクに言われた通りにやってるだけなんです』って言っつけばいい。方針が何でそうなのかって言われたら、『デスクに聞いてくれ』と言えればいい」と。「そんなものは、会社とのあれは、報道本部内とデスクとのやりとりとか、あるいはもっと上のやり取りは全部俺がやるから、君らはあんまり心配しなくていいよ。なんかあったら、全部デスクの責任になるんだから」って。それは言いましたね。（高田デスク）

結構決め台詞色々言いましたからね。「責任は全部俺が取るから」って言いましたね。「責任は全部俺が取るからいいんだよ」って。それと「調査報道はやってみれば絶対面白さわかるから」とか。「こういうものをやれない新聞社とか新聞記者にはなりたくないだろう」とか。なんかそんなことを言っていましたね。（高田デスク）

高田デスクは明確なビジョンや目標を示し、その意義を伝え、A記者、B記者を含む取材班のメンバーらにこの事案を取材するにあたっての不安をできるだけ払拭し、動機付けをしていったという。

警察の裏金ってまあ昔からよく言われていたん

で。だからまああるんだろうなと思ってたし。

（中略）やっぱり高田デスクの言う通りだし、ただここまで最終的にあそこまでやるとは、いくとは思わなかったですけど、まあやっぱりやんなきゃダメだよなって。（中略）高田デスクがまあ早出しみたいなネタ、後々でも言っていましたけども、抜かれてもいいと言うか、落としてもいいと、はっきり言っていましたからね。（A記者）

いくら抜かれてもいいんだというのは初めから言っていたんですよ。それはいいですよ。（B記者）

「あとは俺が責任をとる」は大きいですよ。普通は言えません。私も彼以外から聞いたことないですね。（B記者）

会議で高田デスクの話聞いていたA記者、B記者は、高田デスクが本事例の取材のためなら、いずれ発覚するような事案を先駆けて報道するような「早出し」の記事は、「抜かれ<sup>(2)</sup>」たり、「落とし<sup>(3)</sup>」たりしていても構わない、取材の責任は持つと明言したことで、取材に取り組みやすくなったという。

### 5.3 証拠を発展させる

取材班の記者らは高田デスクの方針のもと、取材を進めた。関係者の取材や証拠資料の入手に奔走していった。その過程の中で高田デスクは、各記者が取材を進めるにあたり、心がけていたことは取材班のメンバーらとの対等な関係構築であったという。

最初の頃から思ってたんですけど、何かの記事を作るときに、責任を最後とる人は組織の中で必要だと。それはそうだと。ただし、現場の1年生記者もキャップも中堅記者もデスクも部長も、記事が流れて行くじゃないですか。僕はそれは単なる作業の分担だと思ってる、昔から。（中略）ど

れかが欠けても記事はできないけど、だからデスクが責任をとるという意味では最後それなりのことをやらなきゃいけないかもしれないけど、基本的には作業分担なので、どっちが偉いということはないと。だから対等だと。(高田デスク)

(高田デスクは)とにかく議論とかなんでもかんでもフラットでしなきゃダメだと。対等な議論はしなきゃダメだと。実際、上意下達みたいなことはしなくて、こっちが言うこともよく聞いてくれたし、自分で違うと思ったことはやっぱりちゃんと修正する人でしたね。(A記者)

上意下達ではなかったってのがすごく大きいと思う。ただ命令されて動くっていうより、それぞれがちゃんと問題意識持って、自分の得意なところを回ったりとか、わりと意見とか言いやすかった。(A記者)

A記者の語りによると、高田デスクと対等に議論ができる雰囲気があったという。また、高田デスクは取材班のメンバーとの対等な議論だけでなく、情報共有も対等に行うように努めていたという。

みんなで共有できるようにしておきました。ファイルを作って。ただしファイルは誰が見るかわからないから、ネタ元の名前は外す。外してメモ打ちしたやつをファイルにして、僕の机の横のところに大体置いてましたね。で、取材班は誰が見てもいいと。みんなで情報共有すると。基本的にみんなが等しい情報を持つと。(高田デスク)

このある部分のこれ聞いてきてと言われて、全体像を知らない、一体自分ほどの部分をなでているかわからないんですよね。そういう状態はやっぱり取材のチームとしては良くないし。一年生だから危ないんじゃないのとかそんな根拠ないですよ。(高田デスク)

このように記者ら一人ひとりが本事例の全体像を描きながら取材に当たれるよう、若手から一人前の記者まで対等に情報が共有されていたという。その分、取材については、高田デスクは各記者へ細かい指示を出すのではなく、目標を明示するのみにとどめ、各自が主体的に取材活動ができるように任せていたという。

基本的に任せたら本当に任せるので。お前に全部任せるよって言って。目標値はこういうところだ。あとは、この件はお前に全部任せるから。(高田デスク)

普段何しろっていう具体的な指示はなかったですね、確かに。それぞれ考えて、自分が持つるネタ元であるとか、自分が思いついたもの、開示請求とかも含めて、やっていけっていう感じ。実際それで動いてましたね。(A記者)

あれやれこれやれだったら、一年間か二年間もモチベーションって続かないと思うんですよ。自分で考えてやらないと。(A記者)

A記者の語りによると、記者がそれぞれ自律性の高い状態で取材を進めることによって、取材班のメンバーは自然とモチベーションを保ちながら自身の強みを生かして取材をしていたという。

明示的にはなかったんですけど、それもやっぱりやっていくうちに。みんな得手不得手が。(中略)やっていくうちになんとなく役割分担ができてきたかなと。(A記者)

たぶん、こういう取材班とかチームって、選抜してやってもうまいこと回らないこともある。優秀な人間を10人集めたからいい結果が出るかっていうと、たぶんそうでもないのかなという気がして。何となく集まった人間でも、得意不得意と

かうまく、最初にガチガチ担当とか権限とか決めるよりも、得意不得意を何となく探って、自然に分担になってみたいなやり方。多少時間が、それをやると何ヶ月か時間がかかるんですけど、というようなやり方だったのかなというか。(A記者)

A記者の語りによると、こうした取材班メンバーの自律性の高い状態で取材活動を行う中で、徐々に適材適所の配置になっていったという。その中で高田デスクは、状況に応じて取材の相談に乗り、記者と一緒に取材の進め方についてアイデアを出し合っていたという。

例えばいわゆる夜回り行ったりして、北海道って広いんですよ。当時、車結構使って、会社の車で札幌近郊とかに夜回り行って、11時とか12時とかに帰ってきてから、集まって飯を食ったりとかを週に1回とかやってたんですね。(中略) 今日夜回りしてこんなことを言っていたとか。じゃあそれ、その話は誰それが詳しいから私が明日、ちょっと当たってみますとか。(A記者)

知恵の出し合いですよ。ただ(ネタを)取ってこいじゃなくて、こういう方向があるんじゃないとか、場合によっては開示請求とか、こういう文書あるはずだとか、あるのかなのかそもそも調べてみるとか。(A記者)

A記者の語りによると、高田デスクは記者が「夜回り<sup>(4)</sup>」をして会社に戻ってきた時など、記者と積極的にコミュニケーションをとりながら、新しいアイデアを提示し合っていたという。

#### 5.4 記事化の準備をする

記事化の準備にあたっては、社内の調整も必要となる。高田デスクは、他のデスク、部長、編集幹部からの取材や原稿に対する意見の受け皿になるよう、常に社内で議論ができる状態を作ってい

たという。

上に対して僕は、なんかおかしいとか、自分のやり方が正しいと思っていないので、必ずしもね、100%正しいと思っていないので、意見をどんどん言ってください。ただし、基本お酒のない場所で。毎日の連日やっている午後からのデスク会議の場で言ってください、というのは言っていましたね。(中略)僕は基本的にネタ元以外は隠さないから。この先どういう記事が出そうなのってことは全部報告します。ずっと言っていましたよ。(高田デスク)

高田デスクは、こうしたデスクらとの会議の場で意見交換を積極的に求め、その上で取材の見通しと報道の意義について説明し続けていたという。

「(調査報道を)しばらくやりますからとかって。(道警が裏金について)認めるまでやりますから」と。「お前認めるわけねえだろ」とか(言われて)。「いや聞いてくださいよ。こういう戦法ですから。とにかく上から行く」とかね。(中略)これをやり続ける意味、認めさせることの意味は説明した記憶があります。(中略)書き放しというのはある意味、報道機関の自己満足なんですと。こんなことを書いたよって。やっぱりその報道の力で社会が変わる、変えることができる。で、しかも最終的には道議会が舞台になっていくので、道議会に道民の関心が集まる、そのきっかけを新聞が作るっていう、いい意味でのサイクルになるはずなのでというようなことは最初の頃は一生懸命言いましたね。(高田デスク)

こうした高田デスクの説明に対して、他のデスクや上司からは強い批判や異論が出てくることはほとんどなかったという。

基本的に、デスク会の場で、何か「大丈夫か?」とか「これやり過ぎだ」とか言われたことはない

んですよ。平場（議論する仕事の間）ではみんな何も言わないんですよ。「今日の良かったね」とか「また1面トップ行ったね」とか。「若いやつ疲れてないか」とか。みんなそんなことしか言わないんですよ。（高田デスク）

（上司から記事を）出すなと言うのはありません。出すなと言うのではないけど、「出す時は慎重にな」ってそれだけです。（高田デスク）

部長は基本的には、時々「大きなものを出す時は事前に、早めに分かる時は早めに言っといてくれ」ぐらいですかね。あと時々、「今の見通しを教えてください」。それから「内容は基本にお前に任せた」くらいですかね。（高田デスク）

会議の場で直接、高田デスクが言われた報道に対する懸念はなく、上司からの言葉もこの程度だったという。しかし、道警との関係悪化を懸念して会議以外の場で水面下に報道を阻もうとする動きがあったという。

（新聞社の）先輩がいて、ある時に「道警との手打ち俺が仲介してやるから、お前どうだ」とかって言ってきたことがあって。しつこく。「全然大丈夫です」「手打ちする必要ありません」って言って。「困ってんだろう」「実は報道しながら、どこで収束させていいか困ってんだろう」とか言われて。「全然困ってません。仲介不要です」とか言って。（高田デスク）

「『道警との関係を全部ぶった切るつもりか』とか、あの人が言ってましたよ」なんて若い記者が言って来たら、「そう？俺はどうでもいいよ、そんな話。直接言ってこない奴は聞かないから」と。突っぱねてましたよ。（高田デスク）

この先どういう記事が出そうなのってことは全

部報告します。ずっと言ってましたよ。それでもそこ（会議の間）では何も出ないで、みんな陰で言うんですよ。「あいつは暴走している」とかね。ずいぶん言われましたね。（高田デスク）

社内の人物から水面下において間接的に批判の声を聞いたり、道警との関係を取り持つ提案を持ちかけられたりしたという。しかし、高田デスクは一貫して公式の議論の場でない交渉や意見については応じない姿勢を見せていたという。

高田デスクがブレない。無理難題言ってくる人いるけど、高田デスクは全部無理難題をそこで止めて、下には言わなかったですもんね。（A記者）

なんとなくあなあで「おいおい、同期が、おい、なんとかちゃん、頼むよ」みたいなのではなく、こういう意味でこうだから一面にすると、それを普段からちゃんと言う。きちんと議論する。なんか言われても、これはこういう価値があるんだと、きちんと説明できる、組織内での最終的な説明責任者ですね。（中略）原稿の意味と意義を説明できる。（高田デスク）

高田デスクは、報道の意義と価値を説明しつつ、水面下のやりとりについては一切応じないという姿勢をとり続け、周囲に干渉されることなく調査報道を行っていったという。

組織人記者にとって大事なことは、当然取材力、文章力、分析力、もう一つは実は原稿を押し出す力。社内の壁を超えて。社内の壁、最初に記者から見れば、最初はキャップの壁があり、デスクの壁がある。でも本当の壁はそっから先にあるわけで、デスクも実はその社内の壁を押し倒していくわけですよ。浴びせ倒していく。その役割だと思うんですよ。（高田デスク）

全体的な見通し、大きな絵をかけるかどうか、これも大きいと思います。で、大きい絵を、書くためにはやっぱり視野が広くないといけないので、そのためにも色んなことを知っておく必要があると思います。もう多分読書量だけは負けなかったと思います。(高田デスク)

高田デスクの語りによると、原稿を記事化するには、社内にも多くの「壁」があり、デスクは上司らを納得させ、「壁」を乗り越えるために、説明責任を果たし、議論していく必要があるという。また今後の報道の展開を見据えられる戦略が求められるという。そのためには、学び続け、知識を得ていく必要もあるという。

## 6 まとめ

### 6.1 インタビューのまとめ

本事例の調査報道のニュース制作過程において、デスクはそれぞれの段階で報道に影響を与える行動をしていたことがうかがえた。それは以下に示すように調査報道の成立を推進・促進する行動であった。

具体的には、調査に関心を持つ段階では、テレビで先に報道された内容を後追いつするよりも、「どうやったら相手(道警)が認めるか」に関心を抱いて取材の組み立てを考えるという方向に思考を働かせていた。

概念化する段階では、過去の資料や新聞記事を時間をかけてリサーチしながらニュースの見立て、つまり仮説を立てることを行っていた。調べた資料などから、本事例は道警が「全体でやっている」問題であり、これらを明るみにして認めさせるという目標設定を行い、スケジュールを立てていた。そして取材班を結成し、会議で取材方針を記した紙を配付して記者らに理解を促した。その際には、取材の進め方を説明するだけでなく、本事例の報道の意義を伝え、「責任は全部俺が取

るから」と伝えて一部の記者らが抱いた懸念の払拭にも努め、動機付けを行っていた。ここで今後の取材方針が明確になっていた。

証拠を発展させる段階では、デスクは現場で取材を進める取材班の記者らと対等な関係構築に努めていた。一方的な指示・命令は行わず、記者らと積極的に議論を交わしていた。記者の意見を聞き入れ、改善すべきポイントがあった際には修正を行っていた。また、取材班の記者には「みんなが等しい情報を持つ」状態を作るため、情報共有をした。メンバー全員が同等の理解を持った上で取材に臨めるように、取材源などの最低限の情報を秘匿した上で取材班全員が情報にアクセスできるようにしていた。記者個人に自律的な取材活動を促し、細かい指示を出すことなく、目標値だけ伝えて任せていた。それによって、記者らはモチベーションを保ちながら互いの強みを生かして役割分担を行っていた。ただし、完全に任せきりだけでなく、場合によってはメンバーの相談に乗り、取材の進め方について「知恵の出し合い」も行うなどして取材活動を支援していた。

記事を準備する段階では、上司や他のデスクらに対して、記者たちの取材活動を含めたすべてのニュース制作に関する説明責任を果たす意識を持っていた。会議では取材の見通しや報道の意義を説明していた。一方で、水面下で行われる交渉や意見には一貫して応じない姿勢を見せていた。

### 6.2 考察

本研究では、調査報道のニュース制作過程におけるデスクの行動に着目した。小俣(2009)や山本(1990)が指摘するデスクの判断力や陣頭指揮、記者たちを鼓舞するなどといった指摘を踏まえ、調査報道成立に資する行動をニュース制作過程において詳細に明らかにすることを試みた。

ここで特筆すべきは、調査報道成立に資するものとして、先行研究では示されていないデスクの行動が明らかになったことである。それは、

Protesら（1991）が示した段階で言えば、2つ目の「概念化する」の段階で、その内容を超え、記者たちに「ビジョンと目標の提示」がなされていたことに表れている。本事例のデスクは、取材を開始する前に2日間かけて戦略を練り、取材班結成時に取材方針を記載した紙を記者に配付し、ビジョン、目標を共有していた。ビジョンを描き、目標を設定することは様々なステークホルダーに働きかける上で重要な行動である可能性がある。

取材対象となる権力機関に対しては、取材開始段階から報道によって権力機関が取るであろう情報統制などの対策を予め想定し、常に一歩先に手を打つことで取材を停滞させることを防ぐことにつながると考えられる。本事例においては、取材開始前から道警の各署への口止めを予測し、反発する道警内部の人物に取材する方針が示されていた。一旦報道が始まると、取材が困難になっていくことが考えられるが、ビジョンがあることで取材を円滑に進められたと考えられる。

取材班の記者らに対しては、記者による目的を持った取材や効率的な取材を促すと考えられる。調査報道は、当局の記者会見やプレスリリースなどを受けてニュースを報じる発表報道のような比較的短期間で記事化する報道とは異なり、不確実かつ長期に及ぶことが多い。そのため、調査報道においてはビジョンや目標が明確に設定されていないと、記者らにとって取材にかかる時間や労力が見通せず、現場に混乱をもたらす恐れがあると考えられる。したがって、調査報道の開始段階でビジョンや目標が設定されていることで、取材が進めやすくなっていたことが考えられる。

他のデスクや上司に対しては説得力を持った説明が可能となる。本事例においても記事化の準備段階においてデスク会議の場でビジョンを懸命に伝えていたが、編集会議の場においてビジョンや目標を持って記事化を主張することによって紙面が獲得されやすくなると考えられる。

これらの行動は、Protesら（1991）では明ら

かになっていない行動ではあるものの、今後の取材の進め方や報道内容に大きく影響を与えていたものと考えられる。山下（1996）が指摘する日本のライン中心の単線型支配による管理体制においては、記者だけでなくニュース制作プロセスの上流に位置するデスクも報道成立には重要な役割を果たしている可能性があり、ビジョンの提示や目標設定もその一つと言える。

さらに、デスクが記者らにビジョンや目標を提示する際には、動機付けも重視されていた。小俣（2009）が調査報道において必要性を指摘する記者たちを鼓舞するという行動に類似するものであると考えられるが、デスクは記者らに調査報道に取り組む意義や面白さを伝えた上で、取材を始めるにあたっての懸念を解消するメッセージを直接伝えていた。これらによって、調査報道のような不確実性が高い探索的な取材を前向きに取り組めるようになった可能性がある。それは先行研究が示した4つの段階に加えるべき、新たなニュース制作過程のフェーズを成していると言えよう。

一方で、デスクは記者一人ひとりに対して、細かな取材方法についての指示はしていなかった。取材段階では、報道内容の不確実性が高く、明確な取材方法がわからないため、詳細な指示はできないということが前提としてある。しかし、本事例のデスクは明確なビジョンや目標を示していたことから、記者が取材現場で創意工夫をしながら進められていたことがうかがえた。また、詳細な指示がなくとも記者らが主体的に活動しやすいよう支援する行動も多く見られた。具体的には情報共有、対等な関係性の構築、取材のアイデアを出すなどの取材に対する支援行動である。その上で、上層部が提示する「無理難題」や報道を阻むような水面下の意見や交渉を止め、記者らの取材の自由を確保するよう努めていた。社内においてデスク同士で議論できる状態も作り、説明責任を引き受けられるように上司に働きかけていた。

記者の自律性は、取材を円滑に進めていく上で

重要な要素である。Hanitzsch (2011) は、18カ国約1,800人のジャーナリストを対象に定量調査を実施し、権力監視に関する報道を実践している記者は、自身の仕事や意思決定のコントロールがしやすく、自律性の高い環境にあることが明らかになっている。専門職としての自律性は、高い業績をあげるために必要不可欠な要因であり (太田, 1998), 専門職集団のマネジメントにおいて、自律性の確保は重要な行動であるとされている。記者は専門的職業である「プロフェッション」と捉えられることがあり (尾高, 1970; 別府, 2006), 記者のマネジメントにおいても同様に自律性の確保が重要であると思われる。

このように、デスクは基本的に直接的に取材を行っていないものの、調査報道の困難さを乗り越え、推進する上では重要な役割を果たしている可能性がある。一般的な報道に比べて、不確実性やリスクが高い調査報道は社内外からの圧力や懸念が生じやすい。その中でデスクがこうした困難を乗り越えるために、経験や知識からビジョンや到達目標を示し、戦略的に取材を推進しながら、現場の記者、他のデスクや上司らと丁寧かつ適切なコミュニケーションをとっていくことが重要だと考えられる。しかし、先行研究ではデスクのこうした行動はほとんど描かれて来なかった。今後、デスクの実証的研究の蓄積によって、権力監視機能を果たす社会的影響度の高い調査報道の増加に資する知見が得られることが期待される。

本研究は、調査報道成立において重要だと指摘されてきたデスクのニュース制作過程における行動の内実を厚みのある記述をもって明らかにしたものである。本研究の知見は、新聞社の単一事例の検証にとどまり、一般化するものではないものの、ニュース制作過程研究において、調査報道成立を巡る組織内部の複雑な編集工程の一片を明らかにしたという点に意義がある。

したがって、さらなる事例、多くのサンプル数を蓄積した探索的研究、記者に焦点を当てた研究、

そしてそれらに基づく定量調査の蓄積が求められる。情報、デスク、報道成立の関係性をより明確にすることも重要である。また、ニュース制作ラインにおいて、デスクの上方に存在する編集幹部からもインタビューを行うことや、傍証としてのインタビューを増やすなど、インタビューデータの信頼性、妥当性の検証を行った上で、重層的な記述として厚みを持たせることも必要である。これらは今後の課題としたい。

### 謝辞

本研究では多大なご支援をいただいた。本事例のデスク、記者には長時間、インタビューに応じていただいた。この場を借りて感謝を申し上げる。

### 注

- (1) 文書において公開されるべきでないと判断した箇所を黒色で塗りつぶすこと
- (2) 他のメディアに先に記事を書かれてしまうこと
- (3) 他のメディアが記事を掲載しているにも関わらず、自社は記事を掲載していないこと
- (4) 記者が夜に取材相手の自宅や帰宅途中の道中などに出向き、取材相手に直接話を聞きに行くこと

### 参考文献

- 別府三奈子 (2006) 『ジャーナリズムの起源』世界思想社。
- 藤森研 (2013) 「解題」『原寿雄自撰 デスク日記1963～68』弓立社, pp.364-396.
- 藤代裕之 (2019) 「フェイクニュース検証記事の制作過程～2018年沖縄県知事選挙における沖縄タイムスを事例として～」『社会情報学』, 8 (2), 143-157.
- 原寿雄 (2008) 「重み増す調査報道」『毎日新聞』, 2008年10月15日朝刊。
- Hanitzsch, T. (2011) Populist disseminators,

- detached watchdogs, critical change agents and opportunist facilitators: Professional milieus, the journalistic field and autonomy in 18 countries. *International Communication Gazette*, 73(6), 477-494.
- 北海道新聞取材班 (2004) 『追及・北海道警「裏金」疑惑』講談社.
- Ivask, S. (2019) Communication between editors and reporters: Feedback and coaching in Estonian dailies' newsrooms. *KOME—An International Journal of Pure Communication Inquiry*, 7 (1), pp.24-41.
- Klein, W. (2010) *The inside stories of modern political scandals: How investigative reporters have changed the course of American History*. ABC-CLIO.
- Lasswell, H.D. (1948) *The Structure and Function of Communication in Society, The Communication of Ideas*, ed. L. Bryson. New York, Harper.
- 毎日新聞旧石器遺跡取材班 (2001) 『発掘捏造』毎日新聞社.
- McQuail, D. (2000) *McQuail's mass communication theory*. Sage publications.
- 根津朝彦 (2019) 『戦後日本ジャーナリズムの思想』東京大学出版会.
- 日本新聞協会編 (2003) 『日本新聞年鑑 '03/'04年版』電通.
- 野村康 (2018) 『社会科学の考え方：認識論，リサーチ・デザイン，手法』名古屋大学出版会.
- 桶田敦 (2015) 「福島第一原発事故 原子力災害報道の諸問題—被災県の放送局におけるニュース生産過程のエスノグラフィーとアンケート調査より—」『社会情報学』, 3 (3), 15-38.
- 小俣一平 (2009) 「「調査報道」の社会史～第4回「調査報道」を阻む壁～」『放送研究と調査』59(5), pp.50-64.
- 大石裕, 岩田温, 藤田真文. (2000) 「地方紙のニュース制作過程——茨城新聞を事例として——」『メディア・コミュニケーション：慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』50, pp.65-86.
- 太田肇 (1998) 『プロフェッショナルと組織—組織と個人の「間接的統合」』同文館出版.
- 大谷昭宏, 宮崎学, 高田昌幸, 佐藤一 (2004) 『警察幹部を逮捕せよ！ 泥沼の裏金作り』旬報社.
- 尾高邦雄 (1970) 『職業の倫理』中央公論社.
- Protess, D. L., Cook, F. L., Doppelt, J. C., Ettema, J. S., Gordon, M. T., Leff, D. R., Miller, P. (1991) *The journalism of outrage*. New York, Guilford.
- Shoemaker, Pamela J., and Stephen D. Reese. (1991), *Mediating the Message in the 21<sup>st</sup> Century: A Media Sociology Perspective*. Routledge.
- Sigal, L. V. (1973) *Reporters and officials: The organization and politics of newsmaking*. DC Heath and company.
- 高田昌幸 (2014) 『真実 新聞が警察に跪いた日』角川書店.
- 武田徹, 藤田真文, 山田健太監 (2014) 『現代ジャーナリズム事典』三省堂.
- 田中美保 (2019) 「デジタル化時代に求められる情報発信と組織改革」『国際 P2M 学会誌』13 (2), pp.261-277.
- 谷口将紀 (2015) 『政治とマスメディア』東京大学出版会.
- 富樫豊, 小俣一平 (2008) 「取材現場で何が起きているのか<下>：2007年NHK記者、カメラマンアンケート調査結果から」『放送研究と調査』58(3), pp.2-27.
- 山本博 (1990) 『追及 体験的調査報道』悠飛社.
- 山下國誥 (1996) 『日本型ジャーナリズム——構造分析と体質改善への模索——』九州大学出版会.
- Yin, R. K. 近藤公彦 (訳) (2011) 『新装版 ケーススタディの方法』千倉書房.